

まち 魅力発信の仕掛けなど学ぶ づくり

富士宮高校 会議所が座談会 渡辺さん（三島専務理事）招き

富士宮市内の高校生が連携し、高校生の視点が地域振興や地方創生、地域ビジネス手法について実践を通して学ぶ富士宮高校会議所の座談会「まちづくりは感動の夢舞台」が25日、西町レトロ館で開催された。特別ゲストとして招かれたNPO法人グラウンドワーク三島専務理事の渡辺豊博さん（都留文科大学特任教授）が語る「水の都三島」の成功モデルから、生徒と一般聴講者が高校生や市民の役割を学んだ。

同NPO法人は、環境悪化に問題意識を持った三島市内の8市民団体が水辺の自然環境再生と復活を目指し、



高校生と語り合う渡辺さん（右）

水辺の環境の空き店舗活用によるにぎわい再生などに始まった活動が地域再生や人材育成へと拡大したことに触れ、現在は地域の人的・環境的資源を生かす、竹のチップ化によるたい肥作りや遊休農地を活用した三島そば栽培など環境コミュニケーションビジネスの創業、中心市街

境の創業、中心市街

地への活用により、再生などに始まった活動が地域再生や人材育成へと拡大したことに触れ、現在は地域の人的・環境的資源を生かす、竹のチップ化によるたい肥作りや遊休農地を活用した三島そば栽培など環境コミュニケーションビジネスの創業、中心市街

境の創業、中心市街

として説明。これらの事例に見られる共通点として▽社会的目的▽ビジネスを通しての目的達成▽ビジネスモデルの選定▽建設的な解決策▽成長産業分野での人材育成▽資金やアドバイスなど外部的な支援▽ライフスタイルとキャリアを挙げ、三島市における企業とNPOとの協働による社会的ビジネスでもイギリスで見聞したことが大いに参考になったとした。

こうした社会的ビジネスの創業では、現状把握と問題意識が重要で、三島市では3年間、地域資源として何があ

るかを確認するため、100カ所に及ぶ川や湧水池、森、里山の問題を洗い出し、どのように環境を再生して観光振興に結び付けるかを検討。訪れる人たちがまちを回遊するため、渡辺さんは「一人の市民としてふるさと再生への個人的な改革プランと実現化へのアクションプランを持

ち、このまちに何が必要かを考え、目標を明確化しないと、何のための活動が見失われる」と指摘した。

高校生たちは、富士宮市にも観光資源に発展する可能性を秘めた「宝」が埋まっているとし、三島市での取り組みを参考にしながら、それらを自分たちの手で掘り起こし、市内外にアピールするための仕掛けをしていきたいとの考えを示した。